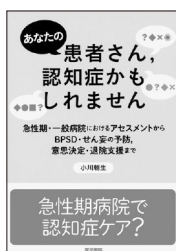


[評者]
桑田美代子
青梅慶友病院/よみうりラン
ド慶友病院看護介護開発室長



あなたの患者さん、 認知症かもしれません

急性期・一般病院におけるアセスメントから
BPSD・せん妄の予防、
意思決定・退院支援まで

小川 朝生 著

● A5 頁 192 2017年 10月
定価：本体 3,500 円+税
[ISBN978-4-260-02852-3]医学書院刊

「桑田さんから紹介された小川先生の本、面白くてもう2回も読んだわ。認知症のことわかっていると思っていたけど、改めて勉強になった！ すぐく読みやすいのよ」と、当法人の看護部長が意気揚々と語ってくれた。面白かったという点は以下の通りである。認知症に関する知識の整理につながった。随所に「ポイント」として、重要な点が簡潔にまとめてあるのも理解の助けになった。そして、皆が疑問に思うことに答えるような書き方になっている。急性期・一般病院で日常起っている現象だから、「ある・ある」と自然に頭に入る。小川先生の講義を聞いている印象さえすると語っていた。

認知症患者は、“大変な患者”の一言で語られてしまう現状もある。スタッフは忙しいのに対応しきれない。そして、ケアする側が大変と受け取れば、それは“不穏”“問題”と表現され、その理由に目が向けられない。ケアする側が不安や混乱を増強させていることに気付いていない。だから、根本の原因解決となる対応にはつながらない。本書は、その根本原因の解決につながる知識、現象のみかたが書かれている。認知症をもつ人の生活のしづらさ、苦痛や不安に焦点をあて、認知症の知識に基づき、その原因がひもとかれている。だから、「なるほど、そうなんだ！」と合点がいくのである。みかたが変わると、現象の受け止め方も変わり、ケアする側の気持ちにも余裕が出てくる。

本書の構成を紹介すると、序章「今急性期病院で起きていること」、1章「一般病院における認知症の問題」、2章「急性期病院における認知症の問題の現れ方」、

3章「認知症を知る」、4章「認知症の人が入院時に体験する苦痛・困難とは」、5章「急性期・一般病院で求められる認知症ケアとは」、6章「認知症・認知機能障害をアセスメントする」、7章「認知機能障害に配慮したコミュニケーション」、8章「認知症の人の痛みを評価する」、9章「食事の問題」、10章「行動心理症状(BPSD)の予防と対応」、11章「認知症の人の治療方針を考える(意思決定支援)」、12章「せん妄を予防しよう」、13章「認知症の退院支援：ケアの場の移行を支える」、14章「患者への心のサポート、社会的支援を提供する」となっている。もちろん、序章から読むのもよいが、私はまず3章と4章を一読し、日頃の実践を想起しながら、最初から読み進めるとより理解が深まるように思う。また、最近「意思決定支援」に注目が集まっている。しかし、認知症患者の意思決定支援は、認知症の知識がなくて行えるわけがない。ケアする側が認知症のことを知って初めて支援できる。本書は、そのための基本的知識が系統的に書かれている。

本書は、急性期・一般病院という「場」に関係なく、誰が手に取っても読む価値がある。その中で、私が最も読んでいただきたいのは、急性期病院の看護管理者の皆さんである。その理由は、看護管理者の方たちの認知症に対するケアの考え方が、スタッフに大きな影響を与えるからである。認知症患者の対応に、倫理的ジレンマを感じているスタッフも少なくない。組織全体で認知症ケアに取り組む時代が到来している。本書は必ず役立つ一冊である。